

東京・伊興遺跡

- 1 所在地 東京都足立区東伊興一丁目・狭間周辺
- 2 調査期間 一九九五年（平7）四月～一九九六年三月
- 3 発掘機関 伊興遺跡調査会
- 4 調査担当者 佐々木彰・松本 晃
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 四世紀～一九世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



（東京東北部）

伊興遺跡は東京都北部の足立区に所在する遺跡であり、地勢的には埼玉県と境を接する毛長川右岸の自然堤防上に位置している。自然堤防を取り巻く低地帯は泥炭層を発達させている。泥炭層中には伊興遺跡内から流入したさまざまな遺物が含まれている。既に一九九四年に木簡が二点出土している（本誌一七号）。

今回、木簡が出土した低地帯もこのような泥炭層が

発達した地点の一つであり、伊興遺跡の北東端に位置している。この付近の低地帯は自然堤防に大きくめぐり込んでおり、毛長川の河岸であった可能性もある。河岸は九世紀以降に埋没したことが出土遺物から理解されていた（関係文献①）。下層を中心に遺物が豊富に出土し、自然遺物とともに小片となった古墳時代の土器類も数多く確認されている。五世紀中葉に位置づけられる韓式系陶質土器もこの地点からの出土である（関係文献②）。

さらに特筆すべきことは、この低地帯からは八〇〇年前後する墨書土器と曲物類をはじめとする木製品類が多量に出土したことがある。今回報告する木簡もこれらの木製品類の一部である。(1)(2)とも下層からの出土であり、出土地点は二mと離れていない。ほぼ同時期に投棄されたと考えている。伴出遺物としては、墨書のある土師器・須恵器杯をはじめとして長頸瓶・フイゴの羽口などがある。

8 木簡の釈文・内容



・「（騎馬像）（騎馬像）

(189)×(59)×8 065

(2)



(1)は下半部分を欠き、左側にもわずかに欠損箇所が認められる木札である。このため上端の馬の顔は見る事ができない。下端にも騎馬像のあることが想定できるが、墨痕は薄く、わずかに人物の顔と馬のたてがみおよび前脚の一部が認められるにすぎない。

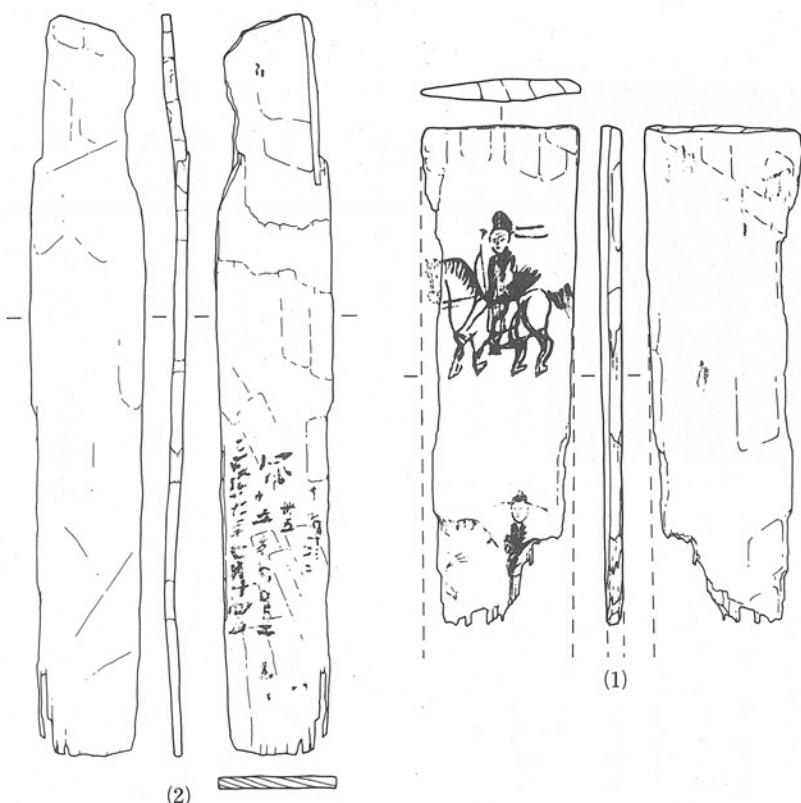
上端の騎馬像の人物は撲頭を被り、弓矢を携え、馬には手綱・鞍らしいものも描かれている。撲頭の纓(紐)は後ろにたなびき、脚も後方へ折り曲げられている。このことから馬を疾駆させた様子を描いたものと考えられる。しかし躍動感もなく静止画的であり、大陸的な絵画手法も垣間見える(唐代李寿墓などに類例)。

木札の断面形はレンズ状で比較的厚手であり、丁寧な削り出しを施している。騎馬像も規則的な配置をとって描かれていることから手すさびなどではなく、あるいは祭祀といった何らかの目的をもって作成されたと考えられる。

(2)はおそらく文書木簡である。赤外線による観察の結果、かろうじて左端部分のみが解読できた。この木簡の出土によって、(1)の年

代も平安時代初頭と推定することが可能となった。

さらにこのような文書木簡の存在から、伊興遺跡が地域の中心的



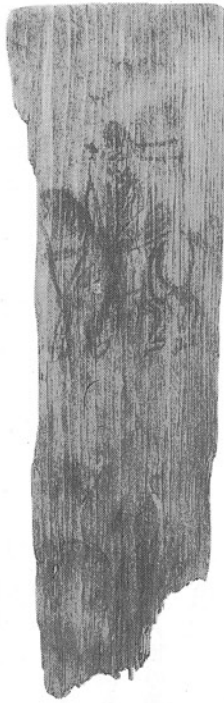
な村落として機能していた可能性がますます強まり、何らかの官衙施設の存在も想定されるようになった。

なお(1)(2)ともその釈文・内容などについて、国立歴史民俗博物館の平川南氏よりご教示を得た。

9 関係文献

- ①伊興遺跡調査会『伊興遺跡―下水道敷設工事に伴う発掘調査』(一九九七年)
- ②酒井清治・松本晃「東京都足立区伊興遺跡出土の陶質土器について」(『韓式土器研究』VI 一九九六年)

(佐々木彰)



(1)裏

東京・丸の内三丁目遺跡

- 1 所在地 東京都千代田区丸の内三丁目
- 2 調査期間 一九九二年(平4)一月～一〇月
- 3 発掘機関 (財)東京都教育文化財団東京都埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 西脇俊郎・上條朝宏・栗城譲一・竹尾 進・武笠 多恵子・岩橋陽一・小林 裕
- 5 遺跡の種類 武家屋敷跡
- 6 遺跡の年代 江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(東京東北部・東京東南部)

調査地は丁有楽町駅北西側の、旧都庁跡地(現在の東京国際フォーラム)に位置する。

調査地周辺は、江戸時代初めに日比谷入江を埋立てた地域である。慶長一三年(一六〇八)頃の様子を描いたとされる『慶長江戸絵図』によると、当地域には山内対馬守・彦坂小刑部・森(毛利)伊予守・福島掃